

総合文化政策学部における英語による講義の実践報告と AWC 利用者へのインタビュー

ヴィクトリア・ストイロヴァ 齋藤 祐希（聞き手）川又 啓子

青山学院大学総合文化政策学部

Practical Report and Interview: Lecturing in English at the School of Cultural and Creative Studies and Using the Academic Writing Center of Aoyama Gakuin University

Keiko Kawamata and Victoria Stoilova

School of Cultural and Creative Studies, Aoyama Gakuin University

要旨：本稿は、総合文化政策学部で3年次英語選択必修科目「英語による日本研究」を担当する教員へのインタビューとアカデミックライティングセンターの利用者である学部学生へのインタビューの載録である。第1章、第2章で本稿執筆の経緯とインタビュー概要を述べたうえで、第3章では、「書く」前提となる「読み」の教育現場の実践を紹介する。続く第4章はアカデミックライティングセンターを利用する学部学生の生の声である。いずれの立場からでも、早期に日本語表現教育を充実させる必要性があることを確認することとなった。

Abstract: This article consists of two interviews: the first one is with a faculty member who teaches a course on Japanese Studies in English at the School of Cultural and Creative Studies (SCCS) at Aoyama Gakuin University (AGU), while the second one was conducted with an undergraduate student currently studying at the SCCS who has used AGU's Academic Writing Center. The first part of this collection of interviews was aimed at eliciting and providing implications on how to approach the problem of academic writing from the field of education focused on close (intensive) reading, which is an essential prerequisite for writing. The second part of the interviews collection is the voice of an undergraduate student who has used the Academic Writing Center of AGU intensively. From both perspectives, it was confirmed that there is a considerable need to improve the way in which Japanese (language) expression is being taught in Japanese academic institutions at the very earliest stages of education.

キーワード：英語による日本研究，日本語表現，アカデミックライティング，レポート課題

1. はじめに

1.1 本稿執筆の経緯

「えっ、ワタシ？」総合文化政策学部でマーケティングを担当している筆者にとって、アカデミックライティングセンター紀要への寄稿を依頼されたことは、まったくの想定外だった。専門外であるにもかかわらずお引き受けしたのは、筆者が数年来、アカデミックライティングセンター（以下、AWC）のガイダンスを演習科目で利用させてもらっているからである。

AWCのガイダンスを利用するきっかけは、総合文化政策学部2年次の「文化基礎演習」での期末レポート（5,000字）にある。前任校では全2年次生に5,000字のレポート（必修）を課していたので、何の疑問ももたずに「各自の好きなテーマについて5,000字程度でレポート」という課題を出した。執筆の準備として後期の後半にテーマに関する発表を毎回させており（履修生が20名だったので5分程度ずつだが）、文献やフォーマットの整え方についても説明したつもりだった。

しかしながら、実際に出てきた現物を見てビックリ仰天。章立ても段落も何もないひとかたまりの文章が少なからずあったからである（もちろん非常に優れた論文もあったが）。恥ずかしながら、レポートの書き方を知らない大学生が存在するという事に思いが至らなかったのだ。なお、当ゼミには総じて成績の良い学生が集まっていることを付言しておく。

そこで、AWCに駆け込んで、次年度から「文化基礎演習（2年次）」と「文化演習（3年次）」においてガイダンスをお願いすることにした。AWCのガイダンスの構成は依頼者によって異なる部分もあると思われるが、論文の構成だけではなく、問いの立て方のワークや引用の方法などの説明もあり、初学者にとって大変有意義で、それ以降は、レポートに愕然とすることなく今日に至っている。

1.2 利用者にとってのアカデミックライティングセンター（2022年11月現在）

さて、AWCの詳細はウェブサイト 青山学院大学 アカデミックライティングセンター^④を参照していただくとして、利用案内（PDF）^⑤から同センターの場所の確認をしてみると、実に分かりにくい場所に存在していることが分かるだろう。



④ アカデミックライティングセンタートップページ ⑤ アカデミックライティングセンター利用案内(冊子)

「サービス業」にとって「立地」は極めて重要だが、これがAWCの認知度が高まらない要因の1つではないかと考えられる。AWC自体の認知度が低ければ、そこで提供されている優れた学生支援サービスについて、学生が知る由もない。

また、「サービス」は「経験財」といわれ、その特性から事前の評価が難しいため、利用に際して感じるリスクが高いことが知られている。ところが、「利用にあたって」に書かれている「支援内容」に「ありません」が多く使われており、構造的に学生にとってハー

ドルが高いままになってしまっているように思える。経験者のクチコミは有効なプロモーション手段だが、AWC を利用してレポート／論文を書き終わった学生が少なすぎる状況では、クチコミだけに依存しても、認知度が急激に高まるとも思われない。しかし、第 4 章の学生へのインタビューで語られているように、一度利用してみれば、AWC は学生にとって、きわめて有用な支援サービスであることが分かるだろう。

本稿は、総合文化政策学部で 3 年次英語選択必修科目「英語による日本研究」を担当する教員へのインタビューと AWC の利用者である学部学生（総合文化政策学部 4 年生 齋藤祐希さん）へのインタビューの載録である。日本文学・比較文学専攻の総合文化政策学部 助教ストイロヴァ先生からは、「読み書き」の重要性を再認識させてもらった。また、ゼミの学生からは、学生支援の方法について示唆を得ることができ、筆者も大いに反省したところである。興味深いことに、いずれの立場から、早期に日本語表現教育を充実させる必要があることを確認することとなった。

なお、本稿掲載に際して、若干の加筆修正を施していることをお断りしておく。

2. インタビュー概要

2.1 英語による講義の実践報告

日 時：2022 年 11 月 7 日（月）13 時から 14 時

場 所：青山学院大学 3 号館 3306 教室

対談者：ヴィクトリア・ストイロヴァ助教（日本文学・比較文学専攻）

担当科目：英語による日本研究Ⅰ，Ⅱ，伝統産業論担当

2.2 AWC 利用者（学部学生）へのインタビュー

日 時：2022 年 11 月 21 日（月）15 時から 16 時

場 所：青山学院大学 3 号館 3306 教室

対談者：総合文化政策学部 4 年生 齋藤 祐希さん

※聞き手はいずれも川又啓子（総合文化政策学部・教授）

3. 英語による講義の実践報告：ヴィクトリア・ストイロヴァ先生へのインタビュー

3.1 「文法や単語を知っていても文脈が読めなければ書けるようにはならない」

川又：本日は、総合文化政策学部で、英語による講義を担当しているヴィクトリア・ストイロヴァ先生に総合文化政策学部の英語講義の指導現場についてお話を伺います。ストイロヴァ先生、どうぞよろしくお願いいたします。

ストイロヴァ：よろしくお願いします。ヴィクトリア・ストイロヴァです。担当科目は、総合文化政策学部の英語の選択必修科目、「英語による日本研究」です。一言で言えば、英語で書かれた日本についての記事、あるいは論文を読んで理解する授業です。

この授業の目的は、英語を読む力を付けることですが、その中心に「英文記事を読んで英語でその記事のサマリーを書く」という作業があります。サマリーを書いてもらうのは、自分の理解に誤解やあいまいなところが残っていないかを検証するためです。将来的に英語や日本語で論文を書く学生もいると思いますが、アカデミックライティングのアブストラクトは、サマリーの延長線上にありますので、まずサマリーを書くことに焦点を絞って、アブストラクトの書き方に生かせるような試みをしています。

私は学生時代に国文を専攻していましたが、源氏物語や夏目漱石ではなく「中世における日本書紀の注釈」が専門で、レトリックやニュアンスではなく、ロジックと構造を読み取る訓練をさせられました。私の学生にもそういった感覚をもってもらいたいので、読み方の授業を行っています。

語学の授業というと、どうしても単語力や文法力の話になってしましますが、私は、それよりも深い部分、たとえば、話者がどの角度から、どのように事象に対峙しているのかを理解してもらいたいと考えています。それを知ることによって、今後、英語圏の人とコミュニケーションを取るときに、あまりギャップを感じないようになるのではないかと思います。もちろん英語力は必要ですが、それを下で支えている部分が分らないと、なかなか本質的な理解に届きません。彼らにそれを実感してもらうことが目的でもあります。

教材として使っているのは、英米のクオリティーペーパー、*Financial Times*, *The New York Times*, *The Wall Street Journal*, *Foreign Policy* などに掲載された、日本文化、日本社会、日本経済など、日本全般に関する記事です。受講生が直面している英語と日本語のギャップはもちろんのこと、書かれている向こう側にある現実に想像力を働かせなければなりません。なぜここではこのような言い方をするのか、なぜ日本では違う言い方をするのか、考えなければならないことが非常に多く出てきますので、クラス全体で一緒に考えることを目指しています。

3.2 受講生の想像力を醸成するためには

川又：一緒に考えることを目指している中で、もともと海外経験がある学生のほうが想像力はありますか。それとも日本でしか教育を受けたことがない学生でも、訓練していくことによってある程度のレベルまで上がっていくものですか。

ストイロヴァ：ある程度までは上がっていきますが、残念ながら同じにはなりません。映像を使いながら授業をして、ある程度想像力を膨らませるようにはもっていけると思いますが、また、それ以前の文法や単語力でつまづいてしまうことも多いので、最初のステップとしては辞書を引きながら、文脈の中で多義語を読む力を付けてもらいます。

その次のステップとして、筆者がどのように日本を捉えているのかを想像します。ギャップがあるので、面白い質問が出てきます。筆者の意見に賛成か、どのように思うかディスカッションをするのですが、やはり筆者の立場になってみないと見えてこない部分があります。その立場と、日本人としての自分のギャップについて、意識的になっている

ように感じます。

先日、*Financial Times* の、日本、中国、韓国など東アジアの教育と出生率の低下についての記事を使いました。初めての試みで、東アジアの中での日本という捉え方をしている点に着目しました。中国の場合、韓国の場合、日本の場合、それぞれの違いはありますが、全体的に出生率がどんどん下がっています。文化的・風土的に似通った国々との比較ができるせいもあってか、学生は非常に興味をもっていました。中国人の留学生もいますので、彼女たちの意見も聞きながら授業を進めました。非常に面白かったです。

川又：学生にも多くの気付きがあったでしょう。素晴らしいです。講義は、日本語を母語とする学生と、中国語を母語とする学生が主な受講生ですか。

ストイロヴァ：はい。タイの交換留学生も1人来ています。英語で講義を行っているので、彼女もついてこられます。私の場合はときどき日本語も使っています。日本人学生がどこまで理解しているのかを知る、一番手っ取り早い方法は和訳です。キーになる部分で、日本語にしてみてくださいと言うと、その部分がきちんと理解できていないことに気が付きます。英語に限らず、1つの言葉は文脈によって多様な意味を持ちます。文脈の中でどういう意味が使われているのか判断をしなければなりません。簡単なことでもそこでつまづいているようです。では辞書で調べましょう、日本語でここはどのように言ったらいいでしょう、といった順序で、理解度を確かめつつ、アップさせるための授業をしています。

3.3 Japan's Gross National Cool を事例として

川又：本番の前に少し先生から伺った、Douglas McGray による *Foreign Policy* の論説“Japan's Gross National Cool”¹⁾ について、先生がこの記事を使って、実際はどのように学生たちを指導されているか、教えてください。

ストイロヴァ：“Japan's Gross National Cool” は非常に有名な論説です。*Foreign Policy* に掲載されてから、Cool Japan という概念が出てきました。長文のウェブページを広告や写真を避けながら読むのはかなり負荷が高いため、本文テキストだけ抽出して、読みやすいように、また、授業を進めやすいようにブロック単位で解説していきます。元はかなりの長文ですが、ブロック単位にすると Twitter や LINE の発言ほどの長さになるので、心理的な敷居がかなり低くなる、このようなスタイルにしました。オンラインの授業の場合、このブロックを拡大した場面を別に用意して、そこにアンダーラインを引いたり、線で囲ったり、ちょっとした注釈を付けたりして、板書授業と同じレベルの情報量を確保できるようにしています。

英語の記事も、論文も、“Japan's Gross National Cool” の論説もそうですが、表題をどのように読むかが重要です。例を出すなら、「Japan's Gross National Cool」は、Japan's Gross National Product に掛けているのですが、Product を Cool に置き換えたこの表題から読み取

れる記事の内容は何か、まず聞きます。サブタイトルもあります。大概、取っ掛かりやすいように言葉遊びが使われていますが、受講生は英語話者ではないので、分からないことが多いように思います。

次に、構造や段落です。論文の大きな構造があって、その中で論点が展開されています。まず、パラグラフ単位で見えていきます。英語の場合、必ず最初にトピックセンテンスがあり、その後はトピックセンテンスで示されたアイデアを用例で展開させるケースが多いです。パラグラフの最後には、結論となります。まず段落として捉えることに慣れてもらうという目的もあります。パラグラフとはそもそもどのようなものなのか、きちんと読んでいくにつれて、例えば1パラグラフ、プラス2パラグラフで、全体の構造はこのようになる、という順番で進めていきます。私は国文学科出身なので、精読にかなり慣らされていますが、精読のように「微妙なニュアンスを読み取る」のではなく、全体の構造や論理展開を読み取る「解読」を目指しています。

“Japan’s Gross National Cool” は、日本文化、日本社会、日本経済、移民問題、法的制度、バブル崩壊、失われた20年、アートなど、本当にテーマが多岐にわたります。それは常にいつもアメリカとの対比で説明されています。アメリカの事情を知らなければ、何を言われているのなかなか分かりません。学生は、向こうのことも学ばなければ、向こうの人たちとうまくコミュニケーションが取れないと気付きます。

一度、全体の論文を読み終わった時点で、私がサマリーを作成します。そのサマリーを全ての学生に渡して、サマリーを読む回を設けます。こういった長文を、どのように非常にコンパクトなたちでまとめているのかに注目して、解説します。

いつも学生たちに言うのは、英語の場合もそうだけれど、日本語にも通じる話で、論点、要点を押さえ、筆者はどのような用例を使い、どのような結論を出すかということです。その中で、書くことの難しさにも気付いてもらえるようにしています。また、表現という観点からは、筆者は論じている、などの言葉をなるべく反復しないように、類語辞典を使わせます。ミクロレベルの表現の豊かさを説明します。仮のサマリーを私が作って、丁寧に説明をしておくと、割とできるようになります。その後は、各学生が関心、興味のある分野の記事を選んでもらい、その記事を最後の2、3回で、人数にもよりますが一緒に読みます。

川又：一緒に読むというのは、例えば皆がバラバラの記事をもち寄って、発表するのですか。

ストイロヴァ：発表ではなくて、私が事前に全ての記事に目を通して、皆に配って、選んだ学生が英語のレベルとしてはどこでつまづいたのか、私が解説します。そして、筆者はどのようなことを伝えようとしているのか、それが分かっているか、チェックします。

3.4 総文生の興味に傾向はあるのか

川又：学生がもってくる記事には、総合文化政策学部生らしい傾向はありますか。たとえば、カルチャー系が多いとか。

ストイロヴァ：傾向はあります。アート、マーケティング、広告系もあります。例えば観光業の広告です。あとは、今とくに円安の関連で、経済に興味をもっている学生も何人かいます。日銀金利は頻繁にニュースに出てくるので、*Financial Times* の日銀やアベノミクスについての長文をもってきていました。

川又：それほど難しいものを選んでくるのですか。先生のご講義から、学生の興味関心がどんどん広がっていくことが分かりました。

3.5 「書く」ために「読む」

川又：サマリーを書かせるということが、いわゆるアブストラクトを書くことの準備段階であると、先生が先ほどおっしゃっていました。とくに今、英語で論文を書く場合は、アブストラクトが良くなければ本文を読んでももらえないと言われます。アブストラクトだけプロが作ってくれるようなサービスもあります。ですから、そこまで大変な時代なのだと思います。すると、まずは書くためにしっかり読む準備をするということですね。

ストイロヴァ：はい。私は本当にその点は譲れません。徹底的に読んで、読む力を付けてもらわないと、書く力も付いてこないということにこだわっています。読めていないと書けません。とにかくたくさん読み、しかも精読に近いかたちで読んでもらう試みだと思っています。

川又：素晴らしいですね。大変、感銘を受けました。これから先、AI の利用などさまざまなことが言われますが、やはり「読む」「書く」ということの重要性は、私は変わらないと思っています。おそらく先生もそう思われているのではないですか。

ストイロヴァ：そうですね。DeepL² のような非常に優れた自動翻訳ツールも出てきています。実務的には十分なレベルだと思います。結果だけが必要であれば、AI でいいじゃないかと思っていますが、人間にとって重要なのは結果ではなくプロセス、言語と格闘するプロセスだと思います。どれだけ AI 君に経験させても、その経験は自分の経験にならないでしょう。

3.6 日本語表現教育の必要性

川又：先生は長く日本に住んでいらっしゃいますし、私も留学の経験がありますが、異なる社会や文化に触れると、あらためて自文化に対しても他文化に対しても意識的、自覚的

になりますね。先生はそういった中でこれから指導をしていく際、学生にとってどのようなサポート機能や支援があるといいと思いますか。

もちろん教員であるわれわれがしなければならないこともありますが、コミュニケーションの基礎を大学で学生に指導していく際に、大学の機能として、あるいはサービスとして、何か学生をサポートできるようなことで、思い付くことがあれば教えてください。もしなければ、外国語教育全般、あるいは日本語教育も含めて、どのような取り組みがあればいいか、アイデアがあれば教えてください。コロナが明けて皆が戻ってきた状況があるので、授業から離れたところでもいいです。

ストイロヴァ：カナダやアメリカ、イギリスの大学もそうですが、図書館のウェブサイトに、メールの書き方やサマリーの書き方、レジュメの作り方に人文系の論文の書き方などの、具体的なマニュアルがあります。先生にどのようにメールを出すかも全てマニュアル化されています。各大学の図書館のウェブサイトに掲載されているのですから、私たちが悩んでいるところは、全世界で共通して悩んでいるように見えます。公開したかたちでマニュアルがあると、学生たちも助かるのではないのでしょうか。

しかも、かなり詳細に書かれているので、学生たちは知恵袋ではなく、オーソライズされたソースで順序だてて見ることができ、実装もできます。そういったものがあると便利です。

川又：AWCは図書館の一部ですが、「書き方マニュアル」のようなものを、学生たちが困ったときにいつでも参照できるシステムを、図書館が提供してくれると良いですね。いずれ書き方の講義を単位付けしなければならない日が来るかもしれません。

ストイロヴァ：とくに総合文化政策学部は、メディアや広告業界を志望している学生が多いので、1年生の必修科目として日本語表現という科目があったほうが良いのではないかと思います。その中でももちろん、さまざまなメールの書き方、サマリーの書き方、美術館のレポート、それこそ総合文化政策学部であれば、とくに1年生は具体的な書き方の授業があったほうが良いでしょう。高校時代であまり習っていない論理の立て方、論理の展開の仕方、構造を教え、課題を通して実装させる試みをしたほうが良いのではないのでしょうか。

川又：私も同感です。どこかの段階で、日本語表現教育が必要だと思っています。はっきり言って、ちゅうちょしている場合ではありません。総合文化政策学部では現在カリキュラム改革をしているので、是非入れてもらえればと思っています。それでは先生、大変興味深いお話をありがとうございました。本日のインタビューを終わります。ありがとうございました。

ストイロヴァ：非常に楽しかったです。ありがとうございました。



4. AWC 利用者へのインタビュー

4.1 初回利用のきっかけは「締切が少し延びたので駆け込んでしまえ」

川又：今日は、総合文化政策学部4年生で私の文化演習を履修している齋藤祐希さんから、実際にレポートあるいは論文の課題に取り組むに際して、AWCをどのように利用したのかについてお話を伺います。

総合文化政策学部では、2年次に文化基礎演習(必修)、3年次そして4年次に文化演習(選択)という演習科目があります。齋藤さんは、2年次のときから私の演習を履修してこられました³。私の演習は、2年次に5,000字、3年次に1万字、卒業論文は1万5,000字と大変負荷が重い科目です。

そこで、2年次、3年次とAWCの先生方にガイダンスをお願いしています。担当者としては、ガイダンスをお願いするようになってからの変化を肌で感じているのですが、今回は、利用する学生さんはどのように感じているのかについてお話を伺いたいと思い、齋藤さんをお願いした次第です。

まず、齋藤さんがAWCをどのように利用されてきたのかお話ししていただけますか。

齋藤：かなり前のことなので、記憶が曖昧な点もありますが、2年次の1月末、本当に提出する直前に1回行きました。もっと早く行けばよかったのですが、そこまで意識がありませんでした。確か、年始の提出だった期限が少し延びましたので、駆け込んでしまえといった気持ちで行った記憶があります。すでにレポートはできあがっていたので、添削というか、どうしたらいいのか相談をしました。「大丈夫ですかワタシ、初5,000字なんですけど」というような感じだったのですが、こうしたほうがいいというより、「時間がないから大変だね。時間がないからどうしようもないけど、もう少しこうしたら良かったかも」といったアドバイスをいただいた記憶があります。

川又：私が笑っている場合ではないのですが、もう少し早く利用した方がよかったかもしれませんが、2年生で相談に行くことが素晴らしいです。

4.2 利用前に感じる不安（リスク）

齋藤：3年生になってからは、先生に相談するというより、少し上のお兄さん、お姉さんに相談しに行く印象でしたが、どのような人が出てくるか分からない不安がありました。2年次に最初から利用するに至らなかったのは、自分自身の意欲が足りなかったところもあるかもしれませんけれども、少し難しい、怖いと思っていたのかもしれません。

川又：誰が出てくるか分かりませんから、確かに不安ですね。齋藤さん達は2年次からコロナ禍になったと思いますが、実際に相談してみて、オンラインとキャンパス、どちらが相談しやすかったですか。違いはありましたか。

齋藤：2年次は完全にコロナ禍で、3年次の利用はコロナと対面半々でした。オンラインのほうが時間が取りやすいですし、リラックスして相談できたので、私自身はオンラインで相談してよかったと思っています。

4.3 3年次での利用の事例

(1) 初回は1枠45分

川又：3年次には何回程度、利用されましたか。どのように進行したのでしょうか。

齋藤：予約サイトから予約して、2回利用しました。予約はすぐに取れました。就職活動があり、時間が限られていたため、自分自身の予定に合わせて取るかたちだったのですが、予約が取りにくいとはあまり感じませんでした。

川又：時間はどれくらいでしたか。

齋藤：わりと長めで、私も45分の予約を取ったけれども、30分で終了することもありました。余裕をもって時間を取っていた印象です。1枠がわりと長かったと思います。時間を全部使わなくてもよい印象で、よかったらここで終了しますといった感じで、自分に合わせて調整ができました。

(2) 「方向性が決まらなくて困っています」

川又：予約をとってから、最初はどのような感じで話をしましたか。

齋藤：オンラインなので最初は、「聞こえていますか」といったやりとりから入りました。最初の予約フォームの段階で、どういった科目でどのようなことに悩んでいるかを事前に

書いておくものがあつたので、それを踏まえて「方向性が決まっていなかったということです、どうですか」「取り組みたい分野は決まっていますが、本当に何も決められていなくて、問いも立てられなくて困っています」といった会話で始まりました。

「方向性が決まらなくて困っています」と言ったら、そのときは「CiNii の既存研究から一緒に見ていきましょうか」と言ってくださいました。キーワード検索についても、自分自身に知識がないとキーワード入力すらできなかったのですが、画面共有をしながら「こういったキーワードを入れてみましょうか」と見せて実践してくれました。「このような文献があるみたいです」「こういったものを題材にしたら面白そう」などのやりとりがありました。

(3) CiNii での既存研究の検索から利用者に寄り添う「お兄さんお姉さん」

川又：齋藤さんが、視界が開ける、あるいは得心がいくなどの体験が、おそらく所定の時間内で何回かあったと思うのですが、それで記憶に残っていることはありますか。

齋藤：相当前の記憶なので鮮明には覚えていませんが、そもそも「問い」を立てるに当たって、自分自身は既存研究から探していく方法を取ったことはありませんでした。2 年次のレポートも、わりとトレンドの話題を入れたので、昔の研究から文献を探して組み立てていくことをしたことがなかったのです。

きちんと先輩方にご指導いただきながら、既存研究の探し方を見せていただきました。「この章立てはこのようになっていて、こういったところが面白いかもしれないね」「海外と比較するのも面白いかも」など、アイデアというか「これも面白いかもしれません」程度の軽い気持ちというか言葉で投げ掛けてくれるので、自分自身がこれは興味がある、これは少し方向性が違うということを発見させてくれる印象です。「これが絶対いいと思います」と示すのではなくて、「こういったものもありますね」といった、自分と同じ立場で話してくれる方だったので、自分自身で整理を付けながら、一個一個進んでいくことができました。面接が終わった後に、こういった方向性で進みたいと決めることができました。

川又：まず、CiNii のキーワード検索の画面を共有しながら、それを 1 つひとつ、これはこうだと、2 人でいろいろと考えていった流れですか。

齋藤：そうです。「これは少し違うかもしれないね」「これは少し気になるトピックが入っているのでは」といった感じで、本当に同学年と話していると言ったら言い過ぎですが、先生と生徒というよりお兄さんお姉さんと私といった雰囲気、非常に話しやすかったです。

川又：1 回目の面接で方向性を決めて、2 回目の面接はどのような内容でしたか。

齋藤：1回目は方向性を、本当に何も分からない状態から助けていただきました。2回目は、その決まった内容と章立てではありませんが、「こういった感じで論文を進めていこうと考えていますが、間違っていないか。論理は成り立っていますか」と確認のようなかたちで、短い時間でしたが、お話を聞いてもらいました。

川又：そのときに、何かアドバイスはもらえましたか。

齋藤：「章立てでこういった感じで考えています」と言ったときに「これだけだと物足りないかもしれないので。ここにもう少し加えてみたらどうだろう」「具体例があるといいかもしれない」などのアドバイスをいただきました。

(4) 具体的な進行日程

川又：レポートの提出期限は1月でしたが、1回目の面談はいつ頃行きましたか。

齋藤：1回目は10月、11月に不安になって駆け込みました。

川又：そうすると2回目は12月ですか。

齋藤：12月の最初か12月の末に、もう1回行きました。

川又：最終的にレポートを出した後、その報告はしましたか。

齋藤：しなかったです。

(5) チューターは選べる

川又：チューターは1回目も2回目も同じ方ですか。

齋藤：同じ方をお願いしました。

川又：チューターは選べるんですね。では、最初はどうしましたか。

齋藤：初回は選べなかったもので、人選をお願いしました。では、この方が来ますと手配してくれました。

川又：2回目からは、指名できると。

齋藤：希望は出せます。もし無理だった場合は、おそらく、この人はこういったことで悩

んでいますという申し送り事項のようなものがあって、前回こういったお話をしたと思いますが、という流れだったと思います。

川又：1 回目に指導方法というか波長が合うようだと、やはり 2 回目に同じ人にしてもらえると助かりますね。

齋藤：そうです。そのほうが、自分はこう成長した、こう路線変更をしていったというのが、段階を踏んでお話しできるのでいいと思います。

(6) AWC は最後まで寄り添ってくれる

川又：サービス業では満足度調査のようなアンケートがよくありますが、面接が終わった後に、そのようなアンケートはありましたか。

齋藤：アンケートといったこちらが回答するものはなかったのですが、フィードバックというかたちでメールが送られていました。3 年次に相談した時には CiNii の論文をわざわざ URL をつけて送っていただきました。AWC では相談して終わりではなく、最後まで寄り添ってくれていると感じました。

川又：ありがとうございました。2 年次の 1 回目から始まって、2 回目、3 回目と齋藤さんのアカデミックライティングセンター利用履歴の概要が分かりました。

5. AWC の利用促進にむけて

5.1 「先生が怖い」ことは利用促進要因の 1 つ？

川又：3 年次の授業内で実施した AWC のガイダンスの際に、担当の先生はいつでも相談に来てくださいとおっしゃっていました。紹介しても利用しない人もいる中、齋藤さんはなぜ利用しようと思ったか、その理由を教えてくださいませんか。

齋藤：3 年次に利用した理由としては、まず、自分自身が何をどう論文にしていこうかという方向性が全く定まらなかったからです。このままでは川又先生にお話しするときに、「あなたは何をしていたのですか」と言われかねないと思い、自分自身でどうにかしたいという気持ちから、天にもすぎる思いでお願いしました。

川又：「先生が怖い」ということは、利用促進に大いにプラスに働くということがよく分かりました（笑）。

5.2 AWC を利用して感じたメリット

川又：実際に使ってみて、こういった点が AWC の良いところだと思いますか。

齋藤：学生側からすると、論文は非常にハードルが高いと思います。ただ単位が取れば良いというレポートもあるとは思いますが、やはりプロの教授に出すレポートなので、きちんと書きたい、書かなきゃいけないという気持ちがあります。

川又：私の演習では書かなければ単位ができませんからね。

齋藤：粗末なものを見せたくない、見せられない人と思う学生もいると思います。そのため、AWCには、最初の出だしの部分から、優しく本当に丁寧に付き合ってくれる方がいることが良いところだと思いました。AWCでは相談して終わりではなく、最後まで寄り添ってくれていると感じました。この人は何を言っているのだろうと思われながら教授にレポートや論文を読まれるのは、つらいと思います。私の場合は、AWCでアドバイスをいただくことで、取りあえずアドバイスどおりに努力したので、少し自信が持てました。

5.3 AWCの利用を阻害する要因

川又：先生が怖いことがこんなに効果があるのかと笑いが止まりませんが、それにもかかわらず、なぜ行く学生と行かない学生がいると思いますか。実際に行くと楽になるのに、なぜ利用しないのか。こういった理由が考えられると思いますか。ただ単に面倒くさいだけとか・・・。

齋藤：面倒くさいのと、得体の知れなさはあると思います。私たちは、先生からガイダンスというかたちで、本当に使える所と知ってはいるけれども、そもそもCiNiiや図書館を利用したことがない学生も絶対いると思います。

川又：絶対いますね（笑）。

齋藤：絶対います。なぜ人の論文を読まなければいけないのかと思う人もいるはずです。それも教えていただけないというか、自分で教わりに行っていない部分もあると思いますが、分からないから、これを利用したところでどうなるのか、どのような人が出てくるのかも分からない。それなら、取りあえずレポートや論文を提出さえすれば単位もらえるかもしれないといった学生が多いと思います。

川又：それはそうですね。私の演習はAWC先生にガイダンスをしていただくうえに、私が何度、これだけのデータベースがあるから、これを利用してくださいとお伝えしても、みんなに浸透しているとはいえません。それでも昔に比べれば良くなりましたが、浸透していないのがよく分かります。そうすると、1つはやはり論文の書き方やプロセスを、これはこういうものなのだといって、1年次から順番に学んでいくことが、大切ではないかと思っています。

齋藤：レポートと論文は少し違うということも分かってない学生が多いと思います。

5.4 論文指導に際しての教員側の問題

川又：本当はその部分を，1 年次からアカデミックライティングの基本を学ぶことが大事です。今，とくにレポートだと，インターネットで検索して切り貼りすればいくらでも出せるので，そうすると，ロジックを組み立てていくことの基本と一緒に考えてくれる組織があったほうが良いに決まっています。

齋藤：あと，1 年次，2 年次でレポートを出したとしても，基本的に大学からのフィードバックはありません。よく書けているのか，もしくは書けていないのかを知ることができません。

川又：すっ，すみません・・・(汗)。

齋藤：いえ，そういうものだと思っはいますが，おそらく自分がロジカルに思考を展開できているのかをうやむやにしている人が多いと思います。自分自身も書けていないし，苦手な気持ちがあります。

川又：齋藤さんは全くそのような心配はありませんが，確かに大学側，率直に言うと教員側も本当は細かく見ていかなければ駄目ですね。しかし，それをしようとすると，レポートの課題が出せなくなります。すみません，これは私の問題です。

齋藤：全くそんなことはありません。しかし，やはり高校生とは違って，自分の考えを教授に見てもらふ機会で，自分の考えを書くものだからといった印象なのかなと思います。

川又：それはそうです。だからあらためて，本当はその訓練をもう 1 回ゼミの中でもしないといけないということがよく分かりました。

5.5 利用者のハードルを下げるために：気軽に利用できる AIM との違い

川又：AWC を実際に利用してみて，これは改善したほうが良いと思う点がありますか。

齋藤：AWC のみなさんに要望したい点とはとくにありませんが，利用のハードルがさらに下げられるといいと思います。どなたがアドバイスしてくださるのかを，よりオープンにしても良いと思います。おそらく，学生は院生の方がチューターをしてくださることは何となくは分かっていますが，院生の誰？といった印象かもしれません。2 号館の情報メディアセンター (AIM) のパソコンや IT スキルの講師の方も，院生の方や学生の方がしていますが，AIM のように皆さんが気軽に行っていいのだと思えたらいいと思います。

川又：AIM は皆さんが気軽に利用している印象がありますか。

齋藤：はい。自己学習用のパソコンがあるので、利用しています。しかし、パソコンは自分で努力してもできない、分からないところがあるので、その場合、利用者は質問しています。どんなにコミュニケーションが苦手な学生でも、しなくてはいけないとなったら、おそらく質問をすると思います。皆さん、積極的に手を上げて聞いている印象です。

川又：このようなことを言うと身も蓋もなくなりますが、まず、AWC の立地が良くありません。あんなに奥に入っていて、あの場所は普通は知りません。

齋藤：どこにあるのか分かりませんね。

川又：それで、来てくださいと呼び掛けても来ません。実は校内のメインストリートの所に毎回、立て看板が出ていますが、おそらく利用したことがある人は、出ているとすぐ分かりますが、利用したことがない人は、見ても分からないかも。

齋藤：立て看板は無視です。視界に入っていない。そもそも「アカデミックライティングセンター」が分かりません。「アカデミックライティングセンターって何ですか」となります。

川又：確かに全く視界に入っていないと思います。どうしても行かなければいけない2号館のAIMと違って、関わらないで済むようになってしまっているから、その辺りが改善点でしょうか。利用のハードルが下がるために、もう少し工夫があるといいと思います。

齋藤：学生が必要性感じられていないかもしれません。

川又：確かにそれもそうですね。相談に乗ってくれるチューターと合うか合わないかが、たとえあったとしても1回話をしてみる・・・しかし、相性でそこまで変わりますか。

齋藤：チャットルームのような雰囲気ではないので、基本的には講師の方なので、皆さん親切ですし、優しいですし、おそらく、合うか合わないかで嫌だなと思うことはないと思います。

5.6 利用者のハードルを下げるために：学生のクチコミも利用できない

川又：聞くことも決まっていますし、まさに雑談しに行くわけではありませんから。今回、AWC 自体の認知度が、あらためてすごく低いのだと分かりました。あんな奥にあって、立て看板しかなくて、利用者は限られていると。そのような状態だと、友達同士の口コミ

も何もありませんね.

齋藤：そうです.

川又：友達間での認知度という質問を次にしようと思っていましたが、おそらく私の演習内のみですね.

齋藤：演習内のみですが、演習内では非常に盛り上がりました。「行った?」「行った!」「行ったほうがいいよ!」などの会話がありました.

川又：本当に、ほぼ私の演習のみなのですが、そもそもそのようなことをよその演習の学生に話しなどしませんね. 私も新任の先生方には、こういったガイダンスがありますのご案内はしていますが、やはり演習の中で1回 AWC がどのようなものかを説明してもらった、その後が非常に違いますね. あらためて思いましたが、ガイダンスをしないで、行ってみてくださいと言っても誰も行きませんね.

齋藤：そもそもガイダンス自体が、非常に基本的なところなので、とても重要だと思います。「問いとは」「主張とは」など、引用の部分と自分の考えや主張など、論文を書く上での体裁のところも、あのプリント(図表1)が一枚あるだけでだいぶ助かります. そもそも、構成自体も例えば1万字の中の何字を「はじめに」で使ってということもそこで知ったので、あれがなかったら、本当に論文は書けなかったと思います.

図1 AWCのガイダンスで用いられるワークシート

「アカデミックなレポート・論文の書き方」 資料①	○年○月○日
(アカデミックライティングセンター)	
📎 個人ワーク：次のようなレポート課題が授業で出されたとします。 以下(1)から(4)の設問にそって、レポートの柱になる部分を考えてみましょう。	
【課題文】	
各自の研究テーマに関するレポートを10,000字以内でまとめて論じなさい。	
(1) 課題文を読んで、思い浮かんだキーワードは？(3つ～5つ挙げる)	
(2) レポートにおける問いは？(＝レポートであなたが取り上げて論じたい問題は？)	
(3) レポートにおけるあなたの主張は？(＝レポートであなたが最も言いたい点は？)	
(4) あなたの主張を裏づける(論証)するためには、どのような根拠が必要か？	
 AOYAMA GAKUIN UNIVERSITY Academic Writing Center	

6. むすびにかえて

6.1 1年次に日本語表現教育を

川又：私の印象としては、やはり1年次のときに、書き方の指導があったほうがいいのではないかなと思っています。そこで、書き方の基本を学べば、後々学生のみなさんに役に立つのではないかなと思っているのですが、どう思いますか。

齋藤：私も1年次に受けたかったと思いました。たとえば、「総合文化政策学入門」の授業のときに、レポート課題を出されたら、おそらく適当に先生が言っていたことを引用して書いてみたという人が多いと思います。その中で、自分の考えを織り交ぜるにしろ、どういったところに着目して主張して、根拠を付けて書いていくと評価につながるか、良いレポートというのはこういうレポートですという例を1回示してもらえるだけで、だいたく学生の書き方も変わってくると思います。高校でレポートを書く機会はないので。

川又：高校ではレポートを書かないのですか。

齋藤：私は書いたことがなかったです。なので、レポートって何ですかというところで、確かに問題文を読んでそのまま書けばいいとは思いますが、書き方が分からない人もいるのではと思います。1年次ではまだ論文は遠い存在ですが、せめてレポートの書き方を1年次に教えてくれたら、私は非常に助かったと思います。

川又：それはそうですね。先日「英語による日本研究」を担当してくださっているストイロヴァ先生にお話を伺いましたが（第3章参照）、やはりどこかの段階で、本当はなるべく早い段階で、読むこともそうですが、書くこともしなければならないのでは、とくに母国語で書くことを本当は早めにしないと駄目ですよと2人で盛り上がりました。したがって、私は、日本語表現の授業が1年次にあるといいと思っていますが、今日あらためて思いました。

また今回のインタビューを通して教員側の課題もよく分かりました。ありがとうございます。演習のレポート以外、執筆以外で、ライティングの基礎を学ぶことにより、何か役立ったことはありますか。

齋藤：レポートを書くときにも、トピックがあったとして、それに対して自分がどう思ったかを書きなさいとは書いてあるけれども、そのみではなくて、さらに深掘りして、自分自身はこういったことを課題に思っ、それはどうしてかということも含めて、小論文ではありませんが、形式を似せることはできたのかなと思います。それを似せることで、自分自身も、レポートを書いた達成感をもてたと思います。今までは、よく分からないけれども、取りあえず字数を埋めて、同じ用語が繰り返し出ているけれども、字数を稼ぐためには仕方ないという気持ちで、レポートにもならない感想文を書いていました。それ

が、今では書きやすくなりましたし、毎回、同じ言葉を入れなくても、きちんと自分の中で章立てて書けるようになりました。

6.2 AWCは「アカデミックライティングとは何ですか」という学生のためにある

川又：最後に何か齋藤さんのほうから、ぜひ伝えておきたいことがありましたら、お願いします。

齋藤：「何が分からないのかが分からない」という問題が、いろいろな現場で起こっていることだと思いますが、AWCには、「何が分からないのかが分からない」ということを解決してくれる人がいる所ということを、学生の皆さんに是非知ってほしいと思います。分からないことを1個でも解決してから、質問内容を考えてからでないと行ってはいけない機関ではないということは、お伝えしたいです。

川又：それは非常に重要な指摘です。学生は何か下書きを持っていかなければいけないと思っているようですが、それは違います。多くの学生が、AWCを添削機関だと思っているかもしれませんが、そうではありません。添削機関ではないので、何となく漠然としていて、これはどうでしょうかといった段階で行って、全く問題ないということです。

齋藤：全く問題ありませんでした。

川又：そこが重要です。学生は何か立派なものを書いて、それにコメントをいただくところだと思ってしまっていると、それは全く違いますし、立派なものでなくても出しているのかと悩む必要もありません。

齋藤：そういったドキドキする体験は、教授の前のみでいいと思います。その前は何でも大丈夫ですということは、ぜひ後輩たちに知ってほしいです。

川又：AWCは、アカデミックライティングした後に行く所ではなくて、これからどうすれば良いのですかということを相談に行く所であり、「アカデミックライティングとは何ですか」という人が行く所です。なぜ「アカデミック」がつくのが分かるようになる場所として行ってくれると、本当にいいと思うし、理系でももちろんレポートは必要ですが、文系の大学生としては非常に大切なことかなと思います。いずれにしても、本日は大変貴重なお話をいただきまして、どうもありがとうございました。

齋藤：ありがとうございました。



注

¹ McGray, D. (2002). Japan's gross national cool. *Foreign policy*, (130), 44.

² DeepL SE (ドイツ・ケルン市) が 2018 年に開発した機械翻訳サービス. <https://www.deepl.com/ja/publisher/> (2022/11/30 閲覧)

³ 総合文化政策学部の文化基礎演習 (2 年次) と文化演習 (3 年次, 4 年次) には連続性がない (2022 年度現在)